命に順位があるのか

小坂井東小・６　杉山　智悠

「命のものさし」は誰が決めて命の重さを測っているのだろう。じゅう医師の仕事は、けがや病気の動物たちの命を助けることだけだと思っていた。しかし、命を救う仕事とうばう仕事もあることを知った。

本に登場する渡邉清一さんは、公務員じゅう医師で、野犬く除や、牛やぶたを食肉として安全に食べられるか検査するとちく検査、動物園の園長や、動物愛護センターなど、様々な仕事をする中で、助けた命より殺した命のほうが多いと話す。

この本を読んでいて、気づいたことがある。それは、清一さんが就いたどの仕事も動物の命をあつかっているのに、仕事が変わればそのあつかいが全く変わるのだ。野犬は誰からも必要とされず、やっかい者として処分される。とちく検査であつかう牛やぶたたちは、そもそも食べられる目的で育てられ処理される。逆に、動物園の動物たちは、宝物のように大切にされ、人気動物に関しては亡くなればニュースになり、けん花台まで設けられる。同じ命のはずなのに、なぜこんなにもあつかいがちがうのだろうか。

本中の写真にある動物愛護センターで殺処分される犬たちの姿が今も頭からはなれない。元はと言えば、かわいいからと買い始め、無責任にはんしょくさせてしまう飼い主や、手に負えなくなったからと犬を捨てる飼い主が悪いのに、何も悪くない犬たちが殺されなければならないのはおかしな話でかわいそうだ。

しかし、スーパーに並べられている食肉を見て、かわいそうだと思ったことはなかった。むしろおいしそうだと思う。からあげ、ハンバーグ、ローストビーフ、焼肉もいいな。考えただけでよだれが出そう。この加工された肉たちも生きていた。生まれた時から、食べてもらうためにおいしくなろうと思って大きくなった牛やぶたはいないだろう。人が生きるためにぎせいになってくれた命なのだ。

「命に順位があるのか」命に順位はない。命はみんな平等だ、そう言い聞かせながらも命に順位があるのだと思わざるを得なかった。この様々な命と関わってきた清一さんの言葉は、とても重く感じた。

全ての命の価値は同じはずだ。しかし、私たち人間がそれぞれもっている「命のものさし」で命の重さを測って、選別し、あつかっている。軽い命や、殺してもよい命などないはずなのに無意識に私も「命のものさし」で測っていた。

全ての動物をかわいがり、同じように接することは難しいと思う。しかし、殺さなくてもよいのに殺さなければならない命を増やさないこと、私たちのために食肉となってくれた動物たちに「いただきます。」と感謝を示すこと、家族としてむかえ入れたペットを最後まで愛することで少しでも命の順位がなくなればよいと思う。人間の勝手なものさしで測られ殺されていく動物たちが少しでも減りますように。

６・９